

松葉屋通信

vol.23 2013.2.20

今年の松葉屋は『山と森と木と人々の暮らし』をテーマに、いろいろな方向をさぐってみたい。

ものをつくることは、いろんな意味で『命を使わせてもらう』こと。

(素材だって、エネルギーだって)

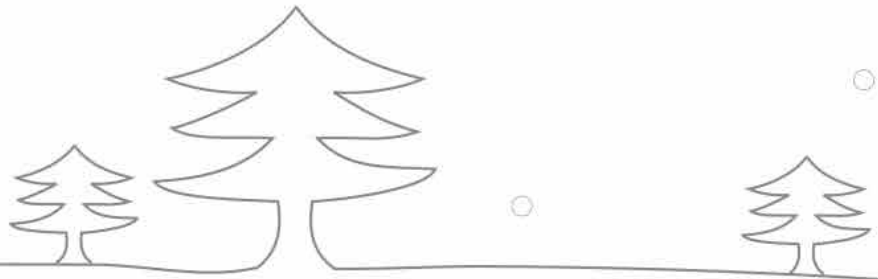
『ほんもの、ほんとうのものづくり』をするために、気づいて、伝えて、体験してもらいたいことがあります。

鳥の名前を覚えなくても、
五感で感じてもらいたい。
「自然が生きている」ことを

そんな思いの善五郎さんがまわりを見回してふと気づいた存在。戸隠で動植物の生態を地道にさぐっているラポザ代表の荒井克人さん。実は善五郎さんの甥っコなんです。
小さい頃から知ってる彼が、いつのまにか山のこと、森のこと、戸隠の生き物のことに、とても詳しい人になっていました。



RAPOSA 代表 荒井克人さん



大人も子供も巻きこんで、一緒に自然を感じたい。

善五郎 ■ラポーザさんの会社の意味と、活動内容を教えてくださいませんか？

荒井 ■ラポーザとはポルトガル語で『キツネ』。キツネは戸隠高原のシンボルで、いつも野山を駆けめぐってる。自分たちもそういう存在になりたくてつけました。

ラポーザの活動は、『エコツアア』や『自然学校』の企画。自分たちが普段感じていることを、子供たち、都会の大人、普段自然に触れない人たちが、自然と触れ合いながら戸隠のよさを知ってもらえればと数年前から続けています。

善五郎 ■何か戸隠に特別な想いがあったら、やっているの？

荒井 ■実家が善光寺の裏なので、父や祖父に連れられてよく遊びました。



善五郎 ■へーどんな遊び？

荒井 ■キャンプ場の川でよく遊びました。石をどかすとサンショウウオや岩魚がいたり…。

四方にある大自然、緑の大事さに気づいて欲しくて、地道な調査を続けながら発信していく。

善五郎 ■自然の中で仕事をしようと思ったきっかけはどんなことだったの？

荒井 ■大学時代を東京ですごしたことで、自分が自然に恵まれた環境にいたことに気づいたんです。自然の中で仕事をしたいなって。

善五郎 ■なかなか長野にいと感じないよね。町を見渡しても「緑が少ない」ってよく言われるけど、長野は自然が自然すぎていて、緑のありがたさや大切さに気づきずら

いよね。

荒井 ■東京であれば、砧公園とか日比谷公園とか。ちょっととした所に大きな緑地空間というものが存在するんです。でも長野は7割が森林だから、身近な町には緑がないように感じる。残念ながら四方にある山には目が向かない…だから発信する必要性を感じてこのNPOを作ったんです。戸隠の自然の豊かさの根拠を、毎日地道に歩いて熊やコウモリ、鳥などの動物がどれだけ豊かに暮らせる森なのかを現状把握するための調査をします。お金にならないけれどもやらないと次のステップにいけないので。

子供たちにワクワク感、冒険心を味わってほしい。

善五郎 ■エコツアアと自然学校ってどういうことをするの？

荒井 ■この頃はどこも昆虫採集したり自炊したり、バーベキューやキャンプファイヤーをやる学校が多いんです。だから自分たちは、自然の良さを肌で感じてもらうための体験。たとえば戸隠の地図と、無線機とコンパス(方位磁石)を持たせて、子供たちを戸隠の自然の中に放つんです。いくつか目標を決めて、それに向かって宝探しや冒険感覚でミッションをクリアしていくことをやっています。

子供の頃サンショウウオや岩魚を捕まえたワクワク感っていうのは、いつまでたっても大切な事です。だから目指すのは『キツザニア』と『自然学校』を足して2で割ったような感じ。

善五郎 ■参加する子供たちは都会の人が多いのかな？

山と森と木と人々の暮らし



荒井 ■ はい。最初は戸惑ってどうやっていいかわからない子がほとんど。ちょっと手助けして一歩初めてしまうと、すごい熱中(笑)。子供の本質ですね。

善五郎 ■ いいですね。すぐ熱中出来るのは、子供ならでは。

荒井 ■ 大人向けのオリエンテーションもやっています。大きな会社の新入社員の研修会では、子供と同じことをやります。必然とやらざるを得ない状況になって、そこで親睦を深めたり協力しあうという目的を果たすことができますから、大いに利用してもらっています。

去年はじめた『ナイトツアー』が好評です。

荒井 ■ 今まででは子どもが行きたいから、親はしょうがなく連れていくという意識だったけど、逆に親が行きたくて、子供を無理矢理にでも連れてきて欲しいと思って企画した『ナイトツアー』。たとえば夕方になると飛んでくるコウモリ。日中洞窟の中にいるイメージだけど、実は木の皮の中にいたり、

意外と身近な所に隠れてるんですよ。あとは動物の鳴き声を聞いたり、夜行性のサンショウウオを池で捕まえてみたり。暗さで先が見えないワクワク感があって、面白いんです。

参加すると実際、お父さんお母さんが熱中するパターンもあるんです(笑)。

善五郎 ■ いいなあ。僕も参加してみたいな。ツアーの申込みはどうすればいいの？

荒井 ■ 通常の『エコツアー』や『自然学校』もそうですが、365日いつでも予約できます。

善五郎 ■ 真冬でも？

荒井 ■ スタッフも機材も限られているので、混んでる時は日程をずらしていただくことはありますが、基本的には対応しています。

戸隠は世界じゅうでも特別な場所なんです。

善五郎 ■ 戸隠の生態的・地理的・景観的にもそうだけど、これこそ戸隠は特別っていう部分はある？

荒井 ■ 昔、戸隠は海だったんですね。地殻変動によって隆起してできたのが戸隠山。戸隠がおわん型になって水が溜まり、土が堆積して湿地になっている。湿地は生物多様性の観点からいうと大変重要なんです。お米を作らないヨーロッパは、農地という土地の広がる牧草地や牧場を指すけど、日本は水田。水があるって言うのは『命の源』なので、色々な生き物がいる一つの貴重な土地になります。戸隠は特に『水』もあり、豊かな『森』もある。だから生物の多様性を生み出している。これだけでも生き物を受け入れる器があって、やはり戸隠はすばらしいところだと思いますね。

松葉屋を見たときは、木目が好きなことが大事だったけど、自生地に行ってみると、見方がかわるかもしれない。

善五郎 ■ 今、松葉屋家具店は、物作りや物の根源・本質みたいなものをお客さんに伝えていきたい。家具は『木』を使う仕事だから、何代にも渡ってその価値が普遍的に変わらなくて、その価値が理解できるように『物』を伝えていきたいと思ってる。

松葉屋の木は『無垢』を使っているけど、木を切って『命をもらってる』という思いがあったから、『生命としての木』を、これからはより意識していきたいと思うんだ。『生命としての木』をお客さんに経験していただくとしたら、どういうことをしたらいいと思う？

荒井 ■ 一日として同じ状況がない自然を見て欲しい。木目が好きで選んだ木が、戸隠のどんな景色の中で、どんな場所を好んで、どんな生き物に囲まれて、長い時間そこに生えているのか、ありのままの姿を見ってみる。五感を使って感じることで、ただ木目が好きだから選ぶんじゃなくて、大きな自然に育まれてきた命を、『使わせてもらっている』っていう感謝の気持ちで日々、使うことができるんじゃないかと思っています。

善五郎 ■ 今日はありがとうございました。



取材協力
RAPOSAワイルドライフリサーチセンター
〒381-4101 長野県長野市戸隠牛王塚3688-9
■長野事務所 〒380-0867 長野県長野市往生地1423-2-732
Tel/Fax: 026-219-5572 <http://raposa.jp/>

松葉屋 井戸端リノベーション はじまりました

井戸端とは…

誰も知らない、誰も踏み入らない、松葉屋の奥の奥家の中に井戸がある子どものころから「井戸端」と呼んでいた場所なのです。



いまでも崩れそうな瓦屋根。どうやら奥の土蔵が明治初期に建てられた折りに、井戸端長屋を切って建てたことが判明。この井戸端は土蔵より古い！



井戸端内部を恥をしのいで公開。まるでゴミ屋敷の主の気分だけ。



さすがに瓦屋根の解体や大工事はセルフビルドできないのでプロにお任せ。百数十年の土ぼこりがすごい。解体屋さんゴメン！しかしこの改修、終わりがあのか？



娘とふたり、はじめての織体験

手紡ぎ草木染めのふんわり糸で、善五郎さんのマフラーづくりました。

織りの先生は十糸さん。

十糸さんは松葉屋の近くにお店があつて、のぞくとフェルトの室内履きをつくっていたり、原毛の手紡ぎ糸で靴下を編んでいたりと、糸を紡いでいたりして、ずっとならなる存在。

わたしもあんな風に、松葉屋で糸を紡いだり、編み物したりしたいなと夢を膨らませていたのです。今年のある日、十糸さんで素敵な手編みのマフラーをみつけました。



「こんなマフラーつくってみたいんですけど」。思い切つて私が言うと、「できますよ」と十糸さん。十糸さんおすすめめの糸の中からいくつか選んで、教えていただく日を予約。そして

きょうは、まさにまつたその日です。雪の降るなか、織り機をかかえて松葉屋まで出てきた十糸さん、ありがとう。まずはお茶と釜焼きのビスケットで、からだを暖めてもらいました。だいたいデザインをきめて、いよいよはじまり。

わたしは初めての織り体験でテンションがあがります。娘は2度目なので、おちついた様子。つう逆です！

あつというまに3時間がすぎ、無事に横糸を織り始めることができました。レッスンはここでいったん終了。織りあがつたところで、また見てもらいます。

十糸さんが帰つたあと、娘とふたり、土蔵のあつたかい空間で、中庭にふる雪を眺めながらシベリウスを聴きながら、織りをする時間は至福のひとつ。娘と順番に織るのだけれど、おもしろくて自分の番がまちきれません。あつという間に織りあがつてしまひそう。あの人もマフラーをつくり

たい、こんな糸もつくりたい。ふたりの頭の中は、今そんなことであつていっぱい。娘とふたりでものづくり、はじまりの日です。



十糸さんのつくる羊たち。表情、毛の色がそれぞれ個性的。息子に似てる、あのコに似てるって選ぶのも楽しい羊。ちょこんと手のひらにのるサイズ。松葉屋で売ってます。¥2100



たて糸を張つてるところ



手紡ぎの原毛の糸と草木染めの糸



上手なご指導のおかげでスイスイ上手に



中庭の降る雪を眺めながら、充実の楽しい時間



松葉屋通信 vol.23

発行所 松葉屋家具店+くらし道具学研究所

〒380-0841
長野市大門町45
TEL 026-232-2346
FAX 026-237-4558
since1833@matubaya-kagu.com
(水曜定休)

発行日 2013年2月20日

© 松葉屋家具店+くらし道具学研究所
Copyright ©2010 Matubayakaguten Co., Ltd.
All rights reserved.